

平成18年12月の解説（週間天気予報）

【12月の天候状況】

上旬の前半は冬型の気圧配置となって日本海側の地方では雪や雨が降り、太平洋側の地方では晴れました。上旬後半から月半ばにかけて低気圧や前線の影響で全国的に雨や雪の降る日が多くなりました。その後下旬の前半にかけて弱い冬型の気圧配置となり、日本海側の地方では雨や雪の降る日が多くなりましたが、太平洋側の地方では晴れました。下旬の後半は低気圧が太平洋沿岸を急速に発達ながら通過して全国的に雨が降り、通過後は強い冬型の気圧配置となって日本海側の地方では雪や雨が降りました。

月を通しての日照時間は西日本の日本海側では平年並、その他の地方では平年を下回りました。降水量は西日本の日本海側では平年並でしたが、その他の地方では平年より多く東日本、北日本の太平洋側では多くの観測地点で平年の300%を超えました。気温はほぼ全国的に平年より高くなりました。

【12月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7日目の平均）は全国平均では例年（注）より2ポイント低い72%でした。多くの地方で例年より低く、特に東海、九州北部、九州南部地方で5から7ポイント低くなりました。最高気温（2～7日目の平均）の予報誤差は関東甲信、東海、近畿、四国地方で例年に比べて0.3から0.6大きく、北海道、沖縄地方で0.4から0.5小さくなり、全国平均では例年と同じ2.3でした。最低気温（2～7日目の平均）の予報誤差は北陸地方で0.4大きく、沖縄地方で0.3小さくなり、全国平均では例年より0.1大きい2.2でした。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【12月の週間天気予報から】

例年12月は冬型の気圧配置となる日が多く、太平洋側の地方では雨や雪が降る日は少なくなります。東京での12月の平年の降水日数（日降水量1mm以上の日数）は約4日です。昨年（2006年）の12月は東京地方としてはめずらしく12日から15日まで4日続けて雨が降りました。

週間天気予報では、13日から15日については本州の南岸に停滞する前線上を低気圧が通過することから、おおむね雨や曇りの予報をしていましたが、12日については晴れや曇りと予報しました（表1）。

		予報発表日							東京の 日中の 天気
		5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	
予報 対象日	12日								12日
		10%	10%	30%	40%	40%	60%		

表1 2006年12月12日の予報（天気と1日の降水確率）と実際の天気（東京大手町の例）

表の見方：左上端のマークは5日に発表した、12日の天気予報が「晴れ時々曇り」だったことを示しています。

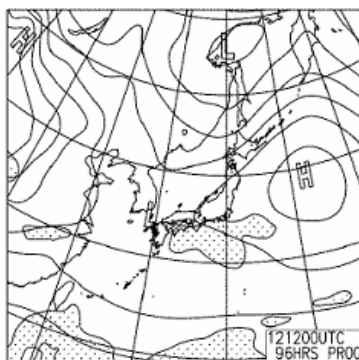


図1a 12月12日21時

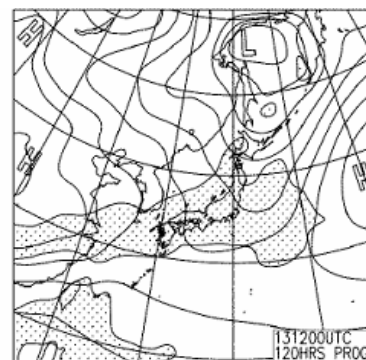


図1b 12月13日21時

図1 12月9日の週間天気予報で使用した予想気圧配置

ハッチのかかった部分は降水が予想される範囲

図1は12月9日発表の週間天気予報で使用した資料です。13日は、南海上にある前線上を低気圧が東進するために関東地方に雨が降る(図1b)と考えましたが、12日は、まだ東海上にある高気圧に覆われるため降水はない(図1a)と判断しました。

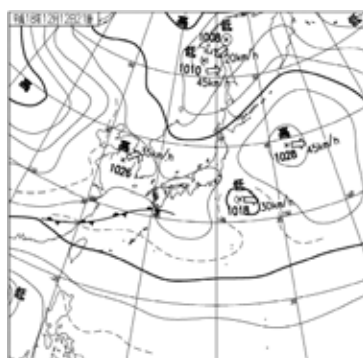


図2a 2006年12月12日21時

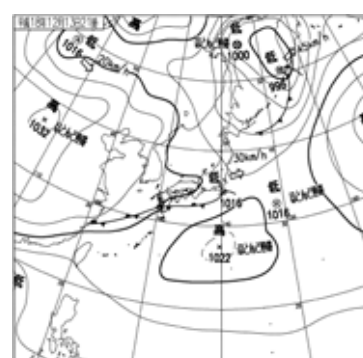


図2b 2006年12月13日21時
実況地上天気図

ところが12日の朝になって関東の南海上に低気圧が発生して東へ進んだため(図2a)、予想より早めに天気が崩れ、東京地方では12日の昼から夕方にかけて雨が降りました。

週間天気予報では、おおまかな気圧配置から地域特性などを考慮して、雨が降ると予想される範囲と時期を予想します。大きな天気の傾向がほぼ予想できた場合でも、予想外の小さな規模の低気圧の発生などによって雨の降る時期が早まったり、雨の範囲が広まったりすることがあります。

【2月の週間天気予報の利用にあたって】

平均的に見ると1月の末から2月の初め頃にかけて1年のうちで気温が最も低くなります。2月は次第に上昇に転じますが、日々の気温の経過は年や地方によってかなり違います。

図3は2000年と2004年の札幌と福岡の1月中旬から2月下旬にかけての日平均気温の経過を示した図です。2000年は2月下旬になっても気温は上がらず、むしろ上旬、中旬より低くなり、平年より低い状態が続きました。一方

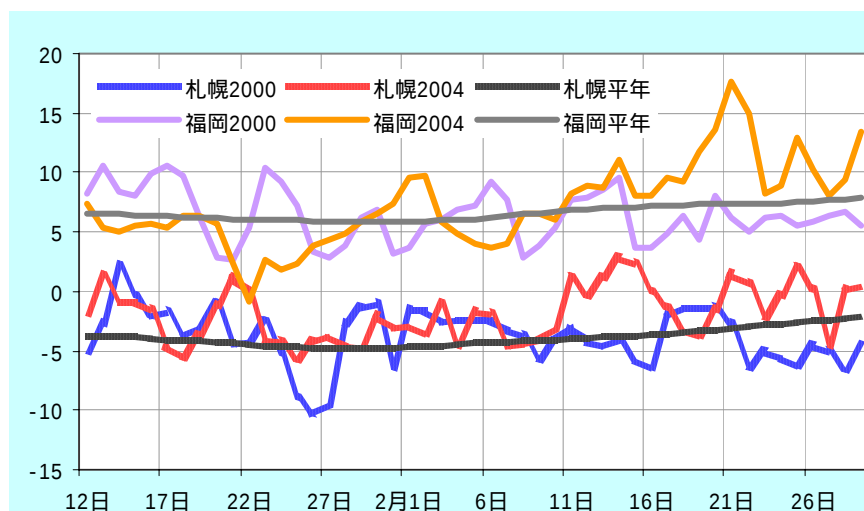


図3 1月～2月の札幌、福岡の日平均気温
(2000年、2004年、平年値)

2004年は、1月下旬に気温が最も低くなった後、2月は急速に上がり、中旬以降は平年の気温を下回った日はほとんどありませんでした。

2月は1月とともに1年で最も気温が低い時期ですが、気温が急速に上がる場合や気温の低い状態が続く場合など年や地方によって様々です。週間天気予報で気温の変化の傾向をつかんで、寒さ対策や健康管理などに活用しましょう。